

ARTIZON
MUSEUM

読書する女性たち

Women Reading

読書する女性たち

Women Reading

ごあいさつ

ヨーロッパでは、読書という画題は、男性に属するものと考えられてきました。書物は、その男性の職業や社会的地位を表すもの、あるいは、知識や権威、思索の象徴としての意味を担っていました。

ルネサンス期に印刷術が発明されると、宗教書以外の書物が市場に回り、17世紀に入ると小説が娯楽のひとつとなりました。18世紀には識字率が向上して、女性の読者が増加しました。そして、読書する女性の姿が多くの絵画に描かれるようになります。

西洋に学んだ日本近代の画家たちも、同じ画題を取りあげました。

本展では、西洋および西洋に学んだ日本近代の画家たちが、どのように読書する女性たちをあらわしてきたかを、石橋財団コレクションの作品を通じて紹介します。

YAMASHITA Shintaro

山下新太郎《読書》1908年
YAMASHITA Shintaro, *Woman Reading*, 1908

「読む」ということ

近代以前、人びとの読み書きの能力を調べる手だてとして、公的な証明書(結婚証明書や遺書)への署名が判断基準とされました。その調査によると、識字率は、フランス全体で見た場合、17世紀末には29%、18世紀なかばには35%、18世紀後半には37%でした。パリだけを見ると、17世紀末には男性が85%、女性が60%とフランス全体よりも高い水準にあり、18世紀後半になると男性が90%、女性が80%となりました。19世紀末には地域差も男女差もなくなり、ほぼ90%に達しました。

このように識字率は高くなりましたが、自分の名前を書くことはできても、文章の意味や内容を理解できない人たちはいました。

逆に、読み書きができなくても、本に書かれた内容を知ることができたことも忘れてはなりません。たとえばフランスの農村では、村の集いで、文字を読める人たちが、文字を読めない人たちのために本を読んで聞かせていたことが知られます。

古本屋で本を手にする人をあらわす版画からは、本が身近な存在になっていることが窺えます。なお、パリのセーヌ川沿いには、17世紀から古本屋(ブキニスト)が店を構えていました。このように、フランスでは、本を読むことを楽しむ人たちが増えていきました。

Paul GAVARNI



Une orgie.

左: ポール・ガヴァルニ《共産派(『仮面と素顔』より)》1852年
Paul GAVARNI, *Sharers* (from *Masks and Faces*), 1852

中・右: ポール・ガヴァルニ《『写生』より》1857-58年
Paul GAVARNI, *From According to Nature*, 1857-58

読書する女性

ヨーロッパの絵画では、高度な知識を持った支配者階級、聖職者、人文主義者の男性たちが、書物を読む姿であらわされてきました。

古代ギリシャ・ローマの書物はパピルス紙の卷子本(巻物)で、古代末期には冊子本が一般化されました。冊子本は、卷子本よりも短い時間で安価に制作できて、広く流通するようになりました。17世紀に入ると短編小説が登場し、小説は娯楽のひとつになります。読書は特権階級に属する限られた人びとのものではなく、市民たちのものになったのです。イギリスとフランスでは、特にその動きが目立ちました。

18世紀中頃にパリを旅行したドイツ人旅行者は、このように書きとめています。

パリでは皆が読んでいる。(…)すべての人びと——とりわけ女性たち——がポケットに一冊の本をしのばせている。馬車の中で、遊歩道で、劇場の幕間に、カフェで、風呂場で読書をしている。店では婦人が、子どもが、職人が、徒弟が読んでいる。日曜日になれば、人びとは玄関の前に腰を下ろして読書する。従僕は後部座席で、御者は自分の座席で、兵士は歩哨に立ちながら(…)

絵画の世界に目を向けると、18世紀になると読書する女性の姿が好んで描かれるようになり、19世紀には人気の画題となりました。

George SMITH



ジョージ・スミス《婦人像》1866年
George SMITH, *Portrait of a Lady*, 1866



ジェームズ・ティソ《もの思い》1881年
James TISSOT, *Reverie*, 1881

もの思いにふける女性、あるいは、読書しない女性

19世紀のフランスでは男女の識字率の差はほとんどありませんでしたが、男女間で読書の分野に違いがありました。男性は社会、経済、政治、スポーツ、女性は小説というように。この時期のブルジョワ階級の少女たちは、自宅で家庭教師に教育を受けていました。室内でピアノを弾いたり、読書したり、縫いものや刺繍を学んだりしながら、家庭的な幸せについて学びました。子どもたちが読書をする姿も、この時期多く描かれていましたが、子どもたちは勉学に励む存在としてあらわされています。

小説や女性向けの雑誌が多く刊行される一方、ブルジョワ階級の男性たちは、女性が知識を持つことは家庭の平和を乱すと、脅威に感じていました。政治や社会への介入はないとしても、小説は読者の情熱をかきたて、貞節や秩序を脅かしかねないとも考えられました。

絵画作品にもそのような考えがあらわれています。男性たちが書物を前にして読書に専念する様子で描かれる一方、女性たちは、しばしばもの思いにふけています。本を開いているものの、彼女たちは、開かれたページに視線を向けていません。室内や戸外で本を傍らに置いてもの思いにふける女性たちは、社会の秩序を脅かすことはなく、家庭を守る存在として描かれているのです。

西洋で学んだ日本人洋画家の場合

ヨーロッパへ留学した日本人画家たちは、西洋にならい、読書する女性を画題としました。たとえば和田英作は、パリ南郊のグレー＝シュル＝ロワンで浅井忠と共同生活を送りながら、宿のそばに住む20歳前後の女性をモデルに制作しました。ふたりの日記によると、モデルの女性は、子どもが泣くのを無視して平気で小説を読んでいたそうです。

読書する女性たちは、西洋的な画題として日本で受け入れられ、多く描かれるようになりました。とりわけ明治末期の文展(文部省美術展覧会)には、「婦人読書図」が多く出品されています。

1886年(明治19)年に小学校令により義務教育が確立し、女学校が増えて生徒数も増加しました。女性たちは髷から解放され、束髪を取り入れます。明治30年代には婦人雑誌の創刊ラッシュも起こります。このように女性をとりまく書物の数は増えているにもかかわらず、女性の読書を制限する動きもありました。家庭での読み物については、家長がその善し悪しを決めるべきとの考えです。しかし若い女性たちは、本の世界に没入することで、「個」の世界を確立したのです。

大正時代になると、読書は良妻賢母というあり方にふさわしくないと考えられるようになりました。読書にふけて家事をないがしろにする風刺画が描かれたほどです。「読書する女性」は、東西の時代背景を伝えてくれる重要な画題です。



遠山五郎《婦人読書図》1922年
TOYAMA Goro, *Woman Reading*, 1922



満谷国四郎《坐婦》1913年
MITSUTANI Kunishiro, *Seated Woman*, 1913

和田英作《読書》1902年
WADA Eisaku, *Woman Reading*, 1902

広辞苑での「読書」

どく・しょ 〔トクショとも〕 書物を読むこと。

——さんどう 〔読書三動〕「朱熹 訓学斎規」読書の法は心動・眼動・口動にあるといふこと。すなわち、本を読むときは心・眼・口をその本に集中して、熟読すれば内容がよくわかることをいふ。

——さんよ 〔読書三益〕「三国志魏志・董遇伝」注、読書に利用すべき三つの余暇。すなわち冬・夜・陰雨の時。三余。

——しゅうかん 〔読書週間〕読書習慣の普及と読書生活の向上をはかるために設定された週間。10月27日から2週間。

——しゅうめう 〔読書尚友〕書物を読むことになつて、古の賢人を友とすること。

——じん 〔読書人〕①読書を好み、よく書物を読む人。
②中国で、科擧により官の資格をえたもの、またそうした家柄の階層。士大夫。ひいては一般に、知識人・学者。

——百遍義自ずから見る 〔三国志魏志・王康伝〕注、どんなに難しい書でも何度くりかえして読めば、意味が自然に明らかになる熟読の必要を説いた言葉。『読書白編』目次から通す」とも。

『広辞苑』（第七版）

主要参考文献(刊行年順)

【単行本】

ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編『読むことの歴史：ヨーロッパ読書史』田村毅ほか訳、大修館書店、2000年
宇野木めぐみ『読書する女たち 十八世紀フランス文学から』藤原書店、2017年

【論文】

林みちこ「初期文展における婦人読書図について」『藝叢』第12号(1996年)、157-190頁
江本菜穂子「本を読む女性」像について その1『名古屋造形大学紀要』第19巻(2013年)、31-40頁
江本菜穂子「本を読む女性」像について その2『名古屋造形大学紀要』第20巻(2014年)、47-58頁
若松昭子「美女と野獣」にみる18世紀の読書観：ポーモン夫人の原作を通して『聖学院大学論叢』第26巻第2号(2014年)、173-188頁
若松昭子「美女と野獣」の読書像とその消失：19世紀挿絵本における変遷『聖学院大学論叢』第17巻第2号(2015年)、159-179頁
松久保修平「近代日本における「女性の読書」表象をめぐって」『アジア近代美術研究会 会報 しるば』第1号(2016年)、18-20頁
渋谷直樹「ヴォルテールと民衆」『仏語仏文学』(関西大学仏文学会)第45号(2019年)、71-106頁

Selections from the Ishibashi Foundation Collection

Special Section

Women Reading

In Europe, reading as a subject in paintings had been thought of as a male activity. The documents being read indicated a man's occupation and social status or, alternatively, signified knowledge, authority, or engagement in thought.

During the Renaissance, the invention of printing brought non-religious texts to market. In the seventeenth century, novels became a source of entertainment. Then, in the eighteenth century, as literacy rates rose, the number of female readers increased. Many paintings depicted women reading.

Modern painters in Japan learned from the West and took up the same subject.

In this exhibition, we present works from the Ishibashi Foundation Collection to explore how artists in the West and modern painters in Japan influenced by the West depicted women reading.



アルベール・ベナール《読書する女(マルチ版『レスタンプ・オリジナル』第9号所収)》1895年刊
Albert BESNARD, *Woman reading* (from *L'Estampe originale*, published by André Marty, Album IX)
Published in 1895



ARTIZON MUSEUM

アーティゾン美術館は、1952年、東京・京橋に開館したブリヂストン美術館を前身に、2020年、展示室の拡張や最新設備とともに大きく生まれ変わりました。美術館のコンセプトは「創造の体感」。古代美術、印象派、日本の近世美術、日本近代洋画、20世紀美術、そして現代美術など約3,000点にわたる石橋財団コレクションを中心に独自の展覧会企画や教育普及、様々な研究活動を行っています。「ART」(アート)と「HORIZON」(地平)を組み合わせた新館名の「ARTIZON」(アーティゾン)には、これらの美術館活動を通じ時代を切り拓くアートの地平と創造性を、多くの方々に感じ取っていただきたいという願いが込められています。



INFO ROOM

4階インフォルームのご案内

4階展示室出口の向かいにあるインフォルームでは、過去の展覧会図録や、デジタルコンテンツを用いた高精細画像による作品紹介等をお楽しみいただけます。



Cover Work

メアリー・カサット

《娘に読み聞かせるオーガスタ》1910年

Mary CASSATT

Augusta Reading to Her Daughter, 1910



石橋財団コレクション

特集コーナー展示

読書する女性たち

2023年9月9日(土)ー11月19日(金)

アーティゾン美術館

企画・執筆: 賀川 恭子

デザイン: 田畑 多嘉司

藤江 尚美

秋本 真奈帆

翻訳: ルシー・S・マクレリー

印刷: 株式会社 野毛印刷社

発行・著作:

公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

Selections from the Ishibashi Foundation Collection

Special Section

Women Reading

9 September (Sat) – 19 November (Fri), 2023

Artizon Museum

Curation and Texts: KAGAWA Kyoko

Design: TABATA Takashi

FUJIE Naomi

AKIMOTO Manaho

Translation into English: Ruth S. McCreery

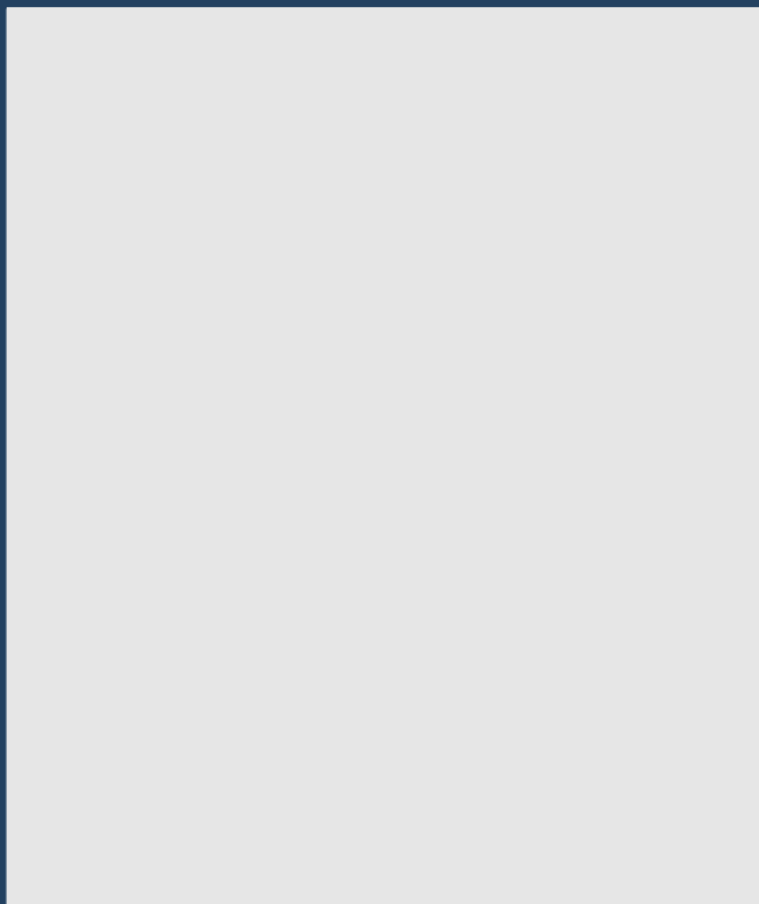
Printed by Noge Printing Corp.

Published by

Artizon Museum, Ishibashi Foundation

1-7-2, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

www.artizon.museum



アンリ・マティス《オダリスク》1926年
Henri MATISSE, *Odalisque*, 1926